北海道・東北学会旅行記

出　　発

7月17日　晴

後になつて悩まされる重い荷物をそれとは知らず　今は軽々と手に，はずんで家を出たその足も大阪駅での時間待ちにはさすがに閉口したらしい。

ほんのわずかな身体の重みを長時間支えるにはあまりにもかよわい足であつた。(決して上体が重すぎたのではなく）のだろう。今まで大事とばかりかかえ込んだ荷物の上に今度は反対にデカツと腰を下す者，あるいは側に置いたスーツケースを横目で　みながらその上に体重を掛けて良いものかどうか思案している者，スラツクススタイルのお姉ちやんのまだ元気な様子をみるに及んで，スーツに帽子，パンプスという正装スタイルの姿勢を持続する事が疲労を来たしたのであろう。

そうこうして一日千秋の思いでホームより身体をのり出しのり出し待つていた急行「いこま」がやつとの事で来た。（11時）

全員座席に落ち着く事によつて待ち草臥れも解消し，少し興ざめになつていたが再び旅行気分に浸る事が出来た。

京都駅では旅行者関係の先生方が多勢見送りに来て下さつた。

そろそろ衣替えをする者も　ちらほら現われ，又口の方は駅弁を食べて間も置かずタベるのに忙がしい。この時の冷凍みかんの忘れもしないおいしさ！

暑い暑い汽車の旅，水筒の水はいくらあつても余る事はない。数分の停車時に汽車より飛び下り水筒に水を満し発車のベルであわてて飛びのる光景は滑稽たりとも涙ぐましい事である。余り売つていなかつたが，アイスクリームではいつそう乾きを覚える。

やがて車内食堂へ行つて一時間ばかりねばつて涼んでくる。

十八時三十分東京着。人と汚れの上野駅で二時間余りも待つて鈍行に乗り込む。

これよりボロシヤツにスラツクス，ブラウスにプリーツ等々になつて寝る準備にとりかかる。足を上げたり下したり，体を起したり倒したり，通路に坐つて座席を頭にしてみたり一夜のうちに幾度となく姿勢を変えてみるがどうしても畳の上のようにはいかない。

皆んな我が身をもてあましている風である。ついには通路に横になる者もいたとか・・・・こうして常のようには安眠出来ぬまゝにそれでも美しいだろう十和田湖を夢みて明日を待つのだつた。

盛岡から十和田まで

7月18日

昨日から丸一日の汽車旅で，皆相当に参つている様子。改めて東北は遠いとの感を強くする。盛岡で小さな電車に乗換える。休暇で旅行中の学生も多い。初めはそれほどでもなかつたが，だんだん土地の人が増えてきた。土地の人の話に耳を傾けると，聞きなれぬ外国語の様，東北弁の本場に来たかと思つた。中年の小母さんとなら，辛じて話が通じるが，お婆さんとは全然通じない。観光の町京都では乗物でお年寄りに席をゆずるのが常識の様に思えるが，旅先でしたことは「ええかつこ」どころか失敗だつた様だ。土地の人はお年寄りでも我々町の若者よりは丈夫で大きな荷物も平気で背負うのだから驚く。おいしそうな，もぎたてのトマトを持つていた小母さんの笑顔が目に浮ぶ。言葉を聞いて，「おや，ここも日本かいなあ。」と思わずにはいられなかつた私達は，真夏だというのに，セーターを着込んでも寒い空気に驚く他なかつた。そうこうするうちに十和田南へ着き，ここからバスで休屋に向う。途中昨日からの乗物疲れと，バスの心地良い振動でガイドさんの声も子守歌に聞えてくる始末。ここで憶えているのは，たゞアカシアの木のみ。ロマンチックで，悲恋を思わせる木，誰れしも思いは同じか，歌声がどこからともなく起つてくる。発荷峠の展望台も私達にとつては展望台とはなつてくれなかつた。いじわるな霧と雨は，私達に何も見せてくれなかつた。恨めしく思い，又うとうとしていると，いつしか雨もやみ，和井内に近づくと私達も十和田を見ることが出来るようになつた。眼下に開ける木々のなかに十和田湖が見えた時，目をとじ，首を振つていた者さえ起きだして「きれいやなあ」なんて勝手なことを言う。カーブするたびに湖が見え隠れする。それはさながら，十和田湖が恥じらいを持つて，私達に歓迎の挨拶をしているかの様だ。下り坂となつて，湖は目前にせまつてくる。その湖の色は，私達の疲れをしばし忘れさせてくれた。

バスは和井内を通り抜け，湖を左方に見ながら進んだ。やがて秋田県から青森県へと，県境いの小さな橋を通過し，今夜の宿十和田観光ホテルへ到着した。